
日陰の男

シュマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日陰の男

【Nコード】

N7170V

【作者名】

シュマ

【あらすじ】

両親を完全なる世界の連中に殺された！

これは復讐あるのみだ！でも僕じゃ勝てない！

じゃあ他の人に任せていいところだけ掻っ攫おう！

だいたいそんな感じの話です。

主人公はダメな子なのでお気を付け下さい

主人公は影

【拝啓 冬が近づきそちらはもう初雪が降るころですね。
厳しい冬の寒さに負けないよう元気に生きてください。

僕は疲れました。

この手紙が届くころには僕はもうこの世にはいないでしょう。
僕は第二の故郷で朽ち果てることにします。

それではさようなら 敬具】

三十を目前に控えた冴えない男の最後は安らかなものだった。

本来なら激痛の中果てるはずだったその体は薬によって安寧の晩
秋を送り、彼がもっとも安らぐ自室にてひっそりとその生を終える。

死にゆく彼に去来するのは空しさに似た諦念と少しの幸せ。愛す
るモノに囲まれたその人生は悪くなかったと、彼は嗤い眠りに落ち
た。

彼はふかふかのベッドの中、眠りに就いていた。自分の人生を振
り返り、笑い、泣き、悔い、怒り、懐かしく思った。最後に自身の

最後を思いひとしきり笑った後、彼は目を覚ます。

「うーあ？」

見知らぬ部屋で

++++

おはようございます。

今僕は森の中を歩いています。

なんで僕赤ん坊なのー！！というという衝撃的な出来事から早十年、光陰矢のごとし・・・・・・時が流れるのは速いですね。

今十歳で僕が末期癌で死んだときは29歳でしたから・・・・39歳ですか、見事にオッサンですね。まあ、身体は10歳なんですけどね。

さてまず僕が10歳になるまでダイジェストで説明します。

・赤ん坊になったあまりの驚きで体中の体液を

どばどば出した僕のところに駆けつけた両親

でも二人とも不気味な仮面をしていて思わず実を出してしまっ

た僕

・僕の様子を見に来る人たちが皆が仮面をしていてまた洩らしてしまふ僕

・どうやら稀によくある転生をしてしまったこと
言語、生活様式の違い、謎の人種がいることからここが異世界であること

僕の家族は代々帝国に使える魔法使いだということ

・やっと体の自由が利きはじめ何気なく顔に触れたらすでに仮面をしていたこと
仮面を着けていることに全く気が付かないほど妙にじっくりくること

・4歳になり魔法の訓練が始まる頃にはすっかり（文字通り）仮面家族に馴染んでいたこと

・魔法の才能はそこそこあり、いろいろ魔法にアレンジをしていたら神童扱いされたこと。しかし僕の一族は操影魔法の適正に特化しており、ほかの系統の魔法が全く使えなくて全体的に地味

・基本的に家族や一族の人としか会わないので、仮面を着けてない人を見るとなんかびっくりしてしまうこと

・ヘラス帝国とメセンブリーナ連合の『大分烈戦争』が勃発してしまったこと

・一昨日、叔父がとある組織の存在の情報を掴んだことで一族郎党皆殺しにされかけたこと

うん、我ながら中々愉快的人生を送ってきたものだ。特に最後のとかどこかの主人公のようだね。一見冷静なように見えるけど、両親が殺されたので腸が煮えくりかえってます。許すまじ完全なる世界め、いつかお前らの頭の上でランバダを踊ってやんよ！

それにしても皆無事に逃げる事が出来たのだろうか

一族のほとんどは遠い親戚を頼りに旧世界なるところに出発したようなんだが、僕も一緒についていけば良かったかもしれない。でも僕を逃がしてくれた両親の仇をなんとかとってやりたいんだよな。

「どうすればあいつらに一矢報いることができるかな・・・。」

うーん、まず僕自身があいつらを撲滅することなんて到底無理だから、他の人に頼ることになるな。一応メセンブリーナ連合が候補なんだけどなんか負けそうだしな。

かといって他に帝国の中枢部まで入り込んでいる連中を潰せる組織なんてそうそうないよな。いっそのこと帝国の中枢までのし上がる？・・・いやいや、無理だよ。僕の一族特有の操影術は相手に知られてるだろうし、のし上がったところで潰されるのが落ちだ。

「やっぱり連合かな」

うん、他に案もないし、連合に行ってからでも遅くないよね？
そうと決まれば、早速連合に向かわないとな。

森に棲む強力な魔物たちを一族の技【影走り】（自らを影の中に潜ませ、臭いや音、気配などを絶って移動する技法）を使ってスイスイ抜けて辿りついたのがオスティアという連合国の一つウェスペルタティア王国の王都であった。

ここは戦場の最前線とだけあって住民のほとんどが避難したように、街の中は閑散としていた。多分郊外に行けば避難している人たちに合流できるはずなので、まずはそこを目指そう。

「この戦争はいつまで続くんだろうねえ？」

「さあねえ、でも私たちにとってはいい迷惑だよ」

「すみませーん」

「あら、どな・・・いやああー！！！」

無事、合流出来た僕は村の人に話しかけようとしたんだけど、あの重大なミスを犯してしまった。

その重大なミスというのは、見た目である。僕の今の姿は真っ黒いフードつきのマントと不気味は仮面……。どう見ても不審人物である。もちろん直ぐに兵士が駆けつけてきて慌てて逃げる羽目になってしまった。

「まずいな、そういえば僕の外見は一族特有のものだったな。」

「どこだー！」

「（おっと危ないちゃんと隠れないと……………）」

路地に身を隠していた僕は兵士が近づいてきたことを察知し、【潜影】（ただ影の中に潜るだけの能力、ただし潜った影が動物などの影だった場合、そのまま影ごと移動してしまう）で路地の影に潜み、通り過ぎる兵士の影に移った。

ふっふっふ、まさに灯台下暗しまさか探している自分の影の中にいると思うまい、このまま情報収集をさせていただきましようか。

「くそっ！見失った！そっちはいたか？」

「いや、見つからなかった。もう此処から逃げてったんじゃない

か？もしかしたら避難してきた住民かもしれないし」

「あんな怪しい奴が敵じゃないはずがない！」

「（ヒドイ！）」

「まあまあ、落ち着けて【紅き翼^{アラルブラ}】って連中が応援に駆けつけてくるらしいし、そう過敏にならなくても……。」

「うーん、けどなあ」

僕の印象はともかく紅き翼か、もしかしたら役に立つかもしれないな。ここに来るとい話だからのんびり待っているとしますか。

毎日どこかの民家から少しずつ食べ物にくすねて、紅い翼を待ってます。なんだがここでは最近狡賢いネズミが出るそうですが、さつさと捕まるといいですねー。

そうそう噂ではヘラス帝国がオステシア回復作戦なるものを行うようで、兵士の皆さんの士気がダダ下がりです。こんなんで大丈夫なんでしょうか？紅き翼が来る前にここが落ちてしまう気がするのですが……。

「大変です！ヘラス帝国の大艦隊が迫ってきています！」

「なに！？急いで戦闘配備に着け！」

「はっ！」

「（ついに本格的な戦争突入みたいです。）」

ちなみに今の僕はここで一番偉い王様の影に潜ませて貰ってます。この人の影にいるといろいろな情報が集まって非常に便利です。例えば黄昏の姫巫女なる防衛兵器があったり、完全なる世界とのつながり等々……ええ、そうなんです。完全なる世界って帝国、連合両方に潜り込んで見たいで、ますますどうしようもない気が……。

「（ぐぬぬっ！）」

「くっ、仕方あるまい。アレの準備をせねばならぬか……。

」

僕がちよつと鬱入っていたら、王様がなにやら動くようです。にしてもこの王様、どう見ても目が死んでいるんですが周りの人は気が付かないんでしょうか？

護衛を引き連れて王様が向かう先は高い塔……もしかして此処に黄昏の姫巫女なる兵器が置かれているんでしょうか？一体どんなものなんでしょう、僕の予想では超威力の戦略固定砲台だと思うのですがどうなんでしょう。

「連れて行け」

「はっ！」

「（王様ー、この子誰ー？）」

塔の地下に向かった王様一行は無機質な部屋に居た小さな少女を連れ出し、塔を登り始めた。

一体この子の正体は何なのでしょう？・・・いやうつす気が付いてましたけど、この子が黄昏の姫巫女？こんなんで防衛できるのかな。

「こんばんわ」

「・・・・・・・・・・。」

オスティアの前衛部隊が頑張ってるようで、どうやら帝国が来るまで一日ほど猶予があるみたいです。

そのせいでこの黄昏の姫巫女ちゃんは塔の頂上に放置されてます。この部屋、吹き抜けで風がびゅびゅういっててかなり寒いです。なんか変な魔法陣もあるしね。

なんでまだここに居るかというと、もしかしたらこの子がアイツらに対する切り札になり得るのではないかと思った僕は何とかこの子とコミュニケーションを取ろうと頑張ってます。

「こんばんわ」

「・・・・・・・・・・?。」

「僕の名前はえーとカゲタロウって言うんだけど君の名前は?」

「アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフユシア」

「そっかアスナっていうんだよろしくね。」

ふう、挨拶しても返事が無かったのはもしかして挨拶自体知らなかっただけなのかも。さて見た目は普通の女の子だけど、なにが特殊な能力でも持っているのか、もしくは超強い戦略魔法でも使えるのかな。

「ところでアスナちゃんはここで何をしてるのかな?」

「・・・・・・・・・・?。」

「えーったとえば物凄い魔法が使えるとかさ。」

「魔法って何?」

「んんといついつの【潜影】」

「・・・・・・・・?すい・・・・。」

どうやらなにも知らないみたいだね。しょうがない今日のところはアスナちゃんの影の中で一晩明かすでしょう。明日になればまた王様が来るだろうしね。

さてとアスナちゃんの機嫌を取って僕のこととは黙ってて貰わないといけないし、色々彼女に教えてあげますか。

++++

朝になって外がすごく騒がしいことになってる。どうやら帝国が王都まで侵攻してきたようで、ここまでやってきた王様の護衛が青ざめて「オワタ」と呟いてバンザイしてる。

「起きろ」

「……ん……………カゲ……………夢？」

「その台座へいけ」

寝起きのアスナちゃんはどうやら僕を探してキョロキョロしていたが、王様に命じられ魔法陣のなかに入っていた。僕？僕はまた王様の影の中に移動しましたよ。

一体何の魔法陣なんでしょうね？なんかビカビカ光ってますけど、大丈夫なんでしょうか？

「陛下！防壁を破られました！」

「来たかつ！始める！」

「（いったい何が始まるんです？）」

そこからはもう何が何だか分からなかった。敵戦艦の砲撃をアスナちゃんを中心とした強力な抗魔法結界が防ぎ、じり貧になったかと思えば、赤い髪の少年がものすごい速さで飛んできて、一面を覆い尽くしていた大艦隊を戦術級の大魔法で一掃するという超展開。ついていくのがやっとで僕は何もすることがなかった。

いきなり現れ帝国の艦隊を駆逐したこの人たちこそ、巷で噂の紅い翼だったのである。ひっそりと王様のところからアスナちゃんの影に潜り込んだ僕は、彼らの会話を聞いていた。

「……………！？」

「ん？どうした姫子ちゃん。」

「こんばんわ？」

「フフフ、今は昼ですからこんにちわですね。」

「……………こんにちわ」

「はい、こんにちは。アスナさんはいい子ですね。」

「カゲに教えて貰ったから……。」

おお、教えたことは即実践。やるじゃないかアスナちゃん、今日も色々教えてあげようかな。例えば愛想笑いの仕方とか。

主人公は影（後書き）

前はネギまの持ち味を消してしまった気がするので
今回は風味を生かした作風にしたいです

あと私はネギまのことを学園ラブコメディーだと認識しています。

アスナちゃん旅に出る

オスティアの危機を救った紅き翼は各地の戦闘を優位に進めてるようです。

それで僕は何をしているかというと――

「うみってきれいなのか？」

「そうですね、一度見たら感動しますよ。とても大きくて広いですから、地平線までみえます。」

「うみ………みたいな。」

相変わらず塔の地下にある牢獄のような部屋にいて一日中暇しているアスナちゃんに王様などが嫌がるような知識を与えて、どうするか試してるところです。

連合も帝国もアイツらが巢食ってて派手に動けないんですよ。つまり僕も暇だということです。紅き翼も期待外れだったからな、ただの武力集団では完全なる世界は潰せないんですよ。

「カゲ………うみがみたいな」

「うん？」

「みにいっつ」

「あ、ちよつとまつ」

僕にそう告げたアスナちゃんはスタスタとこの出口に向かい地下から出ようとした。アスナちゃんが封印処理のなされた強固な魔術結界の扉に触れると、扉は一瞬にして砂に還った。

つてまずい！アスナちゃん本気だ！

僕は扉の向こうにいる監視役（監視してない）を無力化すると男とアスナちゃんを部屋に引き込んだ。

「寝てたところ悪いね。」

「んぐ・・・・・・・・。」

「カゲなんでじゃまするの？」

「アスナちゃん、物事には順序があるんだよ。」

アスナちゃんに世間というものを懇々と説く、その間捕獲した監視が怯えまくってたけどなんだろう？前にもこんな目で見られた気がする。

僕がいくら説得してもアスナちゃんの意味は固く、結局一緒に海

を見に行くこととなった。海を見に行つたあとは世界を見て回りたいそうなので、なかなか長い付き合いになりそうだ。

「では行きましょうか」

「・・・うん」

説明しよう！僕たちは影に潜つて移動したため、誰にも見つからずに王都を脱出した。それとアスナちゃんの魔法無効化能力（仮）は選択的自動能力らしく、僕的能力は無効かされなかった。以上外にあるもの全てが珍しいのかアスナちゃんは頻繁にこれはなにが聞いてくる。

「これはなに？」

「犬です。さて王都から脱出した僕たちは北上して海を目指そうと思います。」

「ほくじょう？」

「うん北上。オスティアは元々海に近いから北に20キロくらいで辿りつけるよ。」

「じゃいこ。」

「うゝん、本当は朝を待った方がいいんだけど、今は逃亡中だしさっさと移動した方がいいかな。」

きつと朝になるまでアスナちゃんが逃げ出したことはバレないと思うけど、少しでも離れた方がいいはず。城の人の身元は全て確認したし、完全なる世界の連中もオスティアのマークが薄かった。せいぜいが下っ端を兵士に紛れ込ませていたぐらいだった。

「どう？無効化の範囲は広げられそうかな。」

「わかんない」

「おお、少し広がってるよ。」

「カゲみて」

「ん？」

「つかまえた」

「く、熊」

ヒュンッ！ヒュッヒュッ！ヒュンッ！

「カゲどう？」

「流石アスナちゃん（何この子、全く隙が読めない・・・。）」「えっへん」

アスナちゃんの無効化能力がどれくらいの範囲のものに効果があるのかを操影術で作った影の球で試したり、魔力による身体強化法を教えたらアスナちゃんが猛獣を狩ってきたり、試しに操影術で作った剣をアスナちゃんに持たせたら演武をしたり、色々と実験してみたらどんどん出てくる新発見・・・どうやらアスナ

ちゃん、才能の塊みたいです。

「アスナちゃんの将来が楽しみです。」

「……？……。」

「もうすぐ海に着きますよ。」

「ほんと？」

「ええ、でも走ったりせずゆっくり行きましょう。」

「……わかった。」

僕がそういうと体がうずうずしてるのが丸わかりなアスナちゃんが、しきりにこちらを振り返りながら先行してくる。

いまさらですが、僕普通に歩いて移動してます。ええ、あの怪しい恰好（原作のカゲタロウみたいな）のままです。この格好は操影術の技法の一つ【影装】というもので、軽くて耐打耐刃対魔法に優れた魔法です。

さらにこの影装は身体強化とリーチを広げるため身長180センチの男の体格になっています。常にこの影装を装備しているので、逆に素の自分の体に違和感を覚えてしまいます。うちの一族の正装みたいなものです。

おっと森が開けてきましたね。もう海に着くみたいです。

段々と見えてくる黒い水平線、夜の海は僕たちを引き込むかのよう
に暗く沈んでいました。

「すごい・・・おおきい・・・これがうみ。」

「もう少しすれば日の出ですので、その辺で待ってみましょうか。」

「うん」

うつすらと明るくなってきた。どうやら此処は浜ではなく岩礁の
ようだ、うんいい景色だ。思ってたのより荒々しいけど、十分だね。

さてアスナちゃんが海に釘付けになっている間に今後の予定でも
考えておくかな。まず行先・・・アスナちゃん次第だね。あ
とで一緒に地図を見ながら行くところを決めよう。

次は旅の目的、僕はまあ復讐ということで、アスナちゃんはどう
しようかな？教養の旅にでもしておくか。復讐と言っても相手のこ
とを全然知らないから情報収集をしないといけないし、教養の旅だ
からアスナちゃんにいろいろ教えないといけないな。一度アリアド
ネーによって必要なものを買おうかな。

「あつ・・・えつとおひさまだっけ？・・・。」

「うつ・・・僕影の中にいるから」

「カゲ？」

「僕太陽苦手なんだよね、目が焼けるかと思ったよ。あつ、好きに動いていいからね。海に入ってきたら？」

「はいれるの？」

「足だけ入れてみたらいいよ。」

「うん」

すそを捲り上げてあげるとそろりそろりと海に入っていくアスナちゃん、そんな彼女を見てほっこりする僕。なんでしょね、この行き場のない父性は、もうアスナちゃんにメロメロですよ。

日が沈むまで遊んでアスナちゃんは疲れたのかぐっすり眠ってしまった。さてがんばりますか。

++++

アスナちゃんと旅を初めて数か月が経った頃、僕らは誰かに追われていた。アスナちゃんの訓練中だったために少し発見が遅れてしまい、完全に捕捉されてしまった。

「くみてちゅうだったのに・・・。」

「うーん、かなり早いね。それに僕の仕掛けたトラップを強引に抜けてきている。同業者じゃなくて、傭兵みたいだね。しかも強い、これはひと当てしないと逃げられないね。」

「どれくらい？」

「負けないけど、絶対に勝てない相手だよ。気を引き締めていこうか」

成長著しいアスナちゃんはもはや僕じゃ勝てなくなった。負けはしないけど、勝てない。魔法はかき消され、近接は鬼のように強いからね。

でもそんなアスナちゃんでも分が悪い相手が追ってきてるようだ。相手はガチガチのパワータイプ、こちらは純粹に力負けするだろうね。

アスナちゃんに近接仕様の影装（動きやすさを重視したびっちりとした鎧、アスナちゃんより大きい剣、自動で防御してくれるマント）を施し、僕はアスナちゃんの影の中でサポートに徹することにする。

こちらに近づく気配の方を見ると、一人の男が現れた。アスナの倍以上の巨軀を誇る浅黒い肌の大男はこちらを確認するとにやけた。大男の体は太く大きい筋肉に包まれ、その手に持つ長大な大剣は男よりも遥かに大きかった。

「やっと見つけたぜ。嬢ちゃんがアスナだな？悪いがついてきてもらっぜ。」

「あなたはだれ？」

「俺か？俺はジャック・ラカン、巷じゃ最強って呼ばれる傭兵よ！」

「ジャック・・・おぼえたわ。ジャックあなたから感じるそれはなに？」

「気づて奴だ、魔力とは違う。なあ、悪いこたあいわねえ。その武器を捨てな、じゃねえといてえ目にあうぞっ」「あなたをたおしたら、わたしがさいきょう？」「」

「ハッ、どうなってもしらねえぞ！」

アスナちゃんの不意打ちは避けられて、逆に右フックをにボディに喰らってしまう。

「あんがいかるいのね」

「へえ、聞いてた情報とは違うな」

しかしアスナちゃんの魔力による身体強化と僕の影装により、ラカンの打撃を完全に殺した。手に残る感触からラカンはこっちの力

量を察知し、さっきまでのにやけ面をやめ真剣になっている。

「オラア！」

「・・・・・・・・・・。」

ラカンの力任せな剣筋は寒気覚えるような速さと大木をへし折る威力を持ち合わせる非常に恐ろしいものであった。流石に二重強化されたアスナちゃんも受け止めるのは不可能と感じたのか、避けることに専念して僅かな隙を突いて攻撃する。

ラカンの攻撃を避けるたびに汗を拭きだし、やがて疲労をあらわにしたアスナちゃんだが無傷で立っている。対してラカンの方は息も上がらずに体に剣のあざは残っているもののほぼ無傷、劣勢である。

「どうやらそろそろ仕舞いのようなな。楽しめたぜ、嬢ちゃん。」

「アスナ・・・・。」

「ククッ、アスナちゃんよ。またやろうぜ！」

「おことわりします」

「へ？」

うんうん、いい経験を積ませて貰ったし、逃げようかな。わが一族に伝わる技法の一つ【黒子】（操影術で人や動物を形作る技法大ささや造形、行動させる範囲で消費する魔力がかわる。）で大量の影の蝙蝠を作成し、ラカンの視界を覆うほどになった蝙蝠は空に散らばって飛んでいった。

さっきまで僕らがいたところには何もなく、ただ風が吹いていた。

「クツ……逃げられたか。まさかあんな量の蝙蝠になつて逃げられるとはな。アスナちゃんつてもしかして吸血鬼だったのか？ いやでもなあ、オスティアの姫巫女がそんなわけないよな。」

「しつかしあの量の蝙蝠になつて逃げられたら、追いかけるのも至難の業だ。いやー、ひさびさに以来失敗だな。まあ、楽しかったからいいけど。」

「（どきどき）」

「（アスナちゃん、無効化しないよう気を付けてね）」

「（だいじょうぶ）」

のそのそと移動するラカンを尻目に僕らは近くの木の影に潜んでいた。えっ？ 蝙蝠？ あれは目隠しですよ、さすがに蝙蝠になつて飛んでいったりはできませんよ。第一撃ち落とされたらたまらないで

す。

行ったようです。それじゃあ、ラカンとは真逆の方向に影走りで移動ですね。あゝ、魔力の消費が激しくてやんなっちゃう。とりあえず遠くに逃げよう。そうしよう

アスナちゃん旅に出る（後書き）

アスナちゃんマジ厨キャラ

それに比べて主人公ときたら逃げることしか能がないです

アスナちゃん修行する（前書き）

アスナちゃん修行する

はじめは辺境の些細な紛争から徐々に確たる意思を持つて帝国の進行は始まった。

のちにアルギュレー・シルチス亜大陸侵攻と呼ばれた帝国の攻勢は、さらに苛烈さを増し、帝国と北の連合の境に位置するウェスペルタティア王国の王都オスティアまで及んだ。

しかし【アラルブラ紅い翼】という無名の武力集団により、帝国による第一次オスティア攻略が失敗し、わずかに戦況に影響が出る。

紅い翼は各地の戦場を渡り歩き、その戦況を一変させた。

そして先日第二次オスティア攻略が始まったらしい。

「魔法というのはですね。魔力を精霊に与え、その代価として魔法という本来起こるはずのない現象を起こすことです。精霊に与える魔力というのは、マナという元物質として空气中に絶えず循環しており、人がマナを取り入れ精神エネルギーと合成することで初めて生まれます。」

「よくわかんない」

「つまり魔力というのは、本来誰でも持っているものなんです。」

そして魔力を持っているのなら誰でも魔法が使える筈なんですよ。」

「でもわたしはつかえないよ」

「大丈夫アスナちゃんも使えますよ。魔法が使えない人というのは、いくつかに分類されます。一つはマナを魔力に変換できない人二つ、精霊に嫌われる人。三つ、精霊を消してしまう人です。」

現在、オスティアが大変なことになっているようですが、遠く離れた僕らにはあまり関係のないことで、今はアスナちゃんを教育していくのが楽しいです。

黒板を使ってアスナちゃんが分かりやすいように、基本魔法学について教えていますけど、結構理解度が早くこれならすぐにでも魔法の練習に入れそうです。

「アスナちゃんは三つ目ですので、魔法無効化能力を使いこなせば、魔法を使うことが出来るますね。」

「やった」

小さくガッツポーズをするアスナちゃん、やはりカワイイ。

「次に得意な魔法属性ですね。これは先天的なものですので、変えるのは非常に難しいです。例えば操影術以外の適正がありません、これは特定の精霊に好かれることで他の精霊に嫌われてしまってい

るからです。精霊は嫉妬深いですから」

「せいれい……。」

「そう精霊、現存するあらゆる魔法が精霊によって引き起こされています。貴方はどんな精霊と縁があるのでしょね？」

さてここからはアスナちゃんの修ぎょ……もとい教育をダイジエストでお送りします。

・アスナちゃん小学校低学年の算数クリア。今は分数に手間取ってます。

・アスナちゃん百人黒子組手を無傷で達成。もはや体術で勝てる気がしない黒子……僕より強いのに……。

・アスナちゃん爆発する。一体なんで爆発したのか知らないけど、本人は至って元気である。本当になんでだ

・アスナちゃんドラゴン捕獲。レザードドラゴンという恐竜みたいな姿の陸上型ですが、ドラゴンはドラゴン。今日はステーキだね！

・アスナちゃん遂に無効化能力のコントロールに成功、やっと魔法の練習ができます。魔法適性は地属性のようです。本人は地味だとぼやいていました。

・アスナちゃん小学校算数の範囲を終える。本人は魔法とか体術の練習より難しく感じてたそうです。今度は中学校の数学だね！

・アスナちゃんとの連携訓練、なんと僕の魔法の矢に無効化能力を乗せることに成功。魔法使いの障壁どころか魔法生物にも効果を発揮、アスナ恐ろしい子！

・アスナちゃん千人黒子組手無傷で達成！………嘘だろ、僕も強くなってるのに、武器とか持たせたり、獣型にしてるのに……アスナちゃんの成長が早すぎる。

・アスナちゃん山を沼にする！彼女には魔法の才能もあったようです。おっそろしいわー、なんでもう中級魔法つかってんの？まだ半年だよな？

・アスナちゃん山賊を返り討ち、勿論手加減がちゃんとできてる。ほとんど体術で倒してた。

・アスナちゃんドラゴン狩り。今度はワイバーンを撫で斬りに。そろそろ才能とかそういう次元じゃなくなってきた。

こうしてみるとすごいね。何者なんだいアスナちゃん。

「わぷっ！」

あつ、爆発した。本当に何してるんだか、そろそろ爆発が強力になってきたからちゃんと聞きださないとまずいかもね。

「アスナちゃん、さっきから何してるの？」

「なんでもない……………」

「白状しないと明日の座学倍にするよ?」

「……………いう。」

最初からこうすればよかったよ。それでアスナちゃんが言うには、僕の影装とアスナちゃんの魔力による身体強化も重ね掛けができるなら、ラカンみたいな気での身体強化も同じくできるんじゃないかと思って練習していたそうだ。

でもうまくいかなくていつも反発し合って爆発するらしい……………
・それ多分アスナちゃんじゃなかったら自爆してるよね。つくづく規格外な能力なこと……………。

「なるほど気と魔力の同時使用か、とても器用なことをしようとするね。」

「……………おこってない?」

「呆れはするも怒ってないよ、ただそういうことは僕に言っただけから試してほしいかな。」

「やっぱりおこってる。」

「ふう、アスナちゃん。着眼点はいいと思うけど、流石に無謀というものだよ。」

僕に叱られてしょんぼりしているアスナちゃんにきちんとしたアドバイスをすることにした。アスナちゃんの考えたことに近いもの、それはもう技術体系として文献に残されている。

気と魔力の同時使用ではなく、気と魔力の合一化、それは器用貧乏の魔法剣士型に大きな波紋を呼んだ。しかしあまりの習得難度の高さに机上の空論とされている。でもアスナちゃんなら普通にできそうだな。

「同時に使うんじゃないくて、合わせちゃえば簡単なんじゃないかな？」

「そうかも」

「まず二つを表面化させて、心を無にして少しずつ混ぜて（山上に澤ある、咸なり。君子、以って虚にして人を受くってね）」

「……………できた。」

「さっすがアスナちゃん！（え、えええええ。なんでこの子できてるの、適当に言っただけなのに……………）」

「カゲのおかげ……………」

僕は何もしてないと思うけど、しかしまたアスナちゃんが強化されちゃったな。いよいよ僕の立場が危うくなってきたな、そろそろ僕も大幅な強化を！

どうやってだよ、アスナちゃんみたいにばんばん成長出来たらと
つくにアイツらのところにカチコミにいつてるよ。

「あはははは」

「・・・カゲ?・・・。」

「ご飯にしようか」

「うん」

ぐっ、泣いてないよ。これは心の汗なんだ、決して悔しいわけじ
ゃないよ。別に七ヶ月で追い抜かれて悔しくなったわけじゃない！

「カゲごはんさめちゃうよ?」

「きよ、今日はドラゴンの尻尾シチューだよ。いっぱい食べてね。」

「うん、カゲのつくるごはんはおいしいからすき」

「・・・ありがとうね」

ちつくしよー！そうだよ、僕が七ヶ月で上達したのは家事スキル
だよ！もうドラゴンを五分で解体できるよ！コトコト煮込んでとろ
っとろのシチューですよ！操影術で圧力釜自作しましたよ！

「おにくやわらかい……。」

「お代わりいるかい？」

「うん」

くっそう、お義父さんそんなこと言われたら明日も頑張っちゃうんだからね。

++++

周りの反応シリーズ

とある秘密結社の場合

「してやられたよ、黄昏の姫巫女が攫われた。どこのどいつか知らないけど、どうやら僕らの目的を知っているようだね。さっさと見つけ出して始末しないと」

とある王様と王女様の場合

「……………かならず見つけ出せ。」目が死んでいる

「どうせなら私を攫ってくればいいのに。それにしても最近父上の様子が……。」

とある第三王女の場合

「むうう、どうやって戦争を止めようかのう。そうじゃ！攫われた王女を使えば、オスティアを引き込めるかもしれん！そして調停役にできれば……よし、腕利きの傭兵を送るのじゃ！」

とある武力集団の場合

「オスティアの姫巫女が誘拐されたようです。」もぐもぐ

「なに！？直ぐに助けに行くぞ！」もしかもしや

「まあ、待ちなさいその肉はまだ生だ。」

「ほう、それは中々の猛者じゃのう」もちもち

「食事中失礼……っ！」

「オスティアの姫巫女？ああ、アスナちゃんか、いやーあれは将来強くなるね。」

「知ってんのかよ！？」

主人公たちは色々なところに狙われているようです。

アスナちゃん修行する（後書き）

アスナちゃんマジチート

とりあえずネギ君のところ書くまでにネギま全巻集めないと

アスナちゃん暴れる

最近、引切り無しに襲われます。もうなんか逃げるのが面倒なくらいに、懸賞金でもかけられてるのでしょうか？

襲ってくる人たちはさまざまで明らかに帝国の兵士や連合の兵士、堅気じゃない連中がくるので僕たちそっちのけで争ったりするので、楽っちゃ楽ですが、こつも連続でこられるとぶち切れそうです。

アスナちゃんがですね。

「そのうち帝国の鬼神兵とかいう兵器も来そう勢いですね。」

「・・・・・・・・」

「えっと、アスナちゃん？」

「つぶす・・・!。」

訂正、もう切れてました。次来る人たちが可哀そうですね。まあ、僕が率先して戦えばいいんですがね。

それにしてもアスナちゃん、最初に比べて表情豊かになりましたね。ただそれが殺意むき出しの顔じゃなければいいんですけど。

「ん〜？どうやら鬼神兵より危険な人たちが来るようですね。戦闘態勢に入りますよ。アスナちゃんを影装して、僕は影の中にと、よしこれでいい。」

「……………」ビキビキ

しばらくその場に待機していると上空から見覚えのある人たちが現れました。どこかで見た褐色の大男に、赤毛の少年、ローブを着た美丈夫、大太刀を携えた青年、何を考えているかよく分からない少年……………これは不味いなんだこの戦力は？

ラカン一人でも厄介なのに、紅い翼+1ですよ。どうやって逃げようか…………。

「……………」ぷつん

「嬢ちゃ〜ん！久しぶりっ！？」

「ら、ラカーン！！」

オープニングヒットはアスナちゃんのヤクザキック、ラカンの鳩尾に華麗に突き刺さりそのままどこかの山までブツ飛ばした。いやー、ラカンのにやけ面をみたたん咸卦法をして、流れるようにいったねえ。

咸卦法もいつもより出力上がってるし、アスナちゃんの頭が冷えるまで好きにやらせた方がいいかな。

「姫子ちゃん！？一体どうっつおー!？」

「ナギっ、離れて!」

「カゲ・・・・・・・・あっち。」

アスナちゃんが手に持つ剣でナギを斬ろうするも、ものすごい動体視力で避けられてしまった。するとアスナちゃんは、自然と後衛になったローブの男に照準を合わせたようだ。

僕がローブの男まで、無数の影の球を配置するとアスナちゃんは僕の作った道を一気に駆け抜け抜けローブの男に迫る。

「くっ、まずい!」

「・・・・・・・・カゲ。」

「させない!」

ローブの男までもう一步というところで、大太刀を持った男に邪魔をされる。しかしそこはアスナちゃん、ばっちり予測済みで僕に先に指示を出し、男と切り結ぶ。

【魔法の射手・戒めの影矢・百影】

僕の放った魔法の矢はアスナちゃんの魔法無効化を纏い、ローブの男目掛けランダムな動きで迫る。ローブの男は余裕を取り戻し、即座に防御魔法を敷くと反撃の準備に取り掛かる。

超一流、そうローブの男はとても優秀である。対魔法の矢の的確な対処、次への一手を打つまでの時間が如実に語っている。しかし誰が思うだろうか？その強固な魔法障壁を無効化する魔法の矢があることを。

「なつ、むぐ……。」

「アル!？」

「詠春！触るでない!」

僕の戒めの影矢は特殊なもので、僕自らが改造した術式になっている。本来は当たると影の手で拘束するというものだが、僕のは当たるとくっつき、取ろうともがくと余計な場所にくっつく厄介なもので、その効果を維持するためにくっついた宿主から魔力を吸うというガムとゴムと宿り木の種を合わせた鬼畜仕様となっている。

黒い物体になったローブの男は飛ぶことが出来なくなり、落ちていき見事に真下にあった木にくっついていた。

「クソ、アルまで……。」

「なんだ？アルの奴もだらしねえな」

「うおっ、ジャックか！」

「おう、それにしてもあの嬢ちゃん、前とは段違いに強いぞ。」

ラカンはやっぱり丈夫だね、ぴんぴんしてるよ。あ、ラカンの楽しくなってきたぜ的なにやけた顔を見て、またアスナちゃんがイライラしてきてる。

目の前にいる詠春とやは、気を抜いちゃダメなんだけどな。これは後で説教だな。

【魔法の射手・影の百矢】 【魔法の射手・陰の一矢】

「むっ、神鳴流に飛び道具に効かつ！？」

「・・・カゲ？」

「ダメだろ、アスナちゃん。この人も最強、あっちが様子見の内に倒さない」と

「ごめんなさい」

「油断は禁物、この人みたいにならないようにね。」

この詠春という男、恐ろしいほどの使い手だ。さっきの仲間を助けるときの動きといい、今のほぼ零距离からの魔法の矢をほぼ全て

叩き落としたことといい、すごく目がいいね。僕にとって一番厄介かもしれないね。

でもその目の良さが命取りだよ。僕の陰矢は君の叩き落とした、影の百矢に隠された必殺の矢。影矢の陰、地を這う陰の矢だよ。

そして一族の技法の一つ【影縫い】（相手の影に刺すことで、相手の動きを止めることが出来る技。）を使い、動きを止める。

「さあ、次にいこうか【魔法の射手・戒めの影矢・二十影】」

「・・・・・・・・あのこ。」

「むう、詠春までもが・・・・まいったのう。ナギ！姫巫女の影にいる奴を引きはがせ！」

ナギとラカンとは後回しか、アスナちゃん的には搦め手を使いそうな後衛タイプのが嫌みたいだね。まずあの少年まで影の球を配置して「オラア！させねえよ！」あら、ラカンに全部壊されちゃった。

「師匠はアルと詠春を頼むぜ！」

「そっちは任せたぞ。」

「ハッハハ、嬢ちゃんまたやろっぜ！」

「ラカン！そこの姫子ちゃんの影でこそこそやってる奴を引きず

り出すぞ！」

うわー、面倒なことになったね。最強と無敵のそろい踏みだよ。

「アスナちゃん、あの子の方に行って、こっちは僕が抑えるから」

「カゲ・・・。」

「心配しないで、ちょっと遊ぶだけだよ。」

「・・・・・・・・。」

まあ、アスナちゃんの方は心配いらないね。魔法使いの天敵だし、近接もできるし、なによりあそこは地面が近いからね。

それよりも僕だよ。

「なんか出てきたぞ？」

「へっ！こっちを倒せば、姫子ちゃんも正気に戻ると見た！」

「んー、違うと思うが、まあいいか！行かせナギ！」

「おっ、」

なんだこいつら……放出される魔力と気がアスナちゃん以上だ。困った……困った時の【黒子】だね！

「操影術【黒子千人組手】」

「おお、なんかいっぱい出てきたぞ！」

「しやらくせえ！まとめてやるぜ！【雷のぼつ、あぶねえ！？】」

今は冷や汗がでたな、ナギという奴。いきなり膨大な量の魔力を収束してきて、咄嗟に戒めの影矢を撃たないと危ないところだった。それにしても影矢がすごい警戒されてますね。

さて僕はナギの影に隠れて、ねちねちといきましょうか。まずは一族の技法【影重ね】（相手の影に憑依することで、相手を再現することが出来る）を【黒子】に使って、ナギの動きを再現させる。

「こいつらナギみてえな、動きしてるぜ。」

「へっ、こんな奴らと一緒にすんな！」

「まあ、スピードはまあまあだが脆いしな。でもすぐに増えるから面倒くせえな。」

そう【影重ね】をしたところで所詮は動きの再現、ナギ自身の再現ではないからね。いつものようにぼろぼろやられてるよ。

普通ならこれで十分なんだけど、この連中はアスナちゃんと一緒に別に次元にいる化け物ですね。こう実力差があると、勝つのは絶望的です。大人しく時間を稼ぐことに集中しますか。

「あー！イライラするぜ！でかいのを打とうとすると魔法の矢が飛んできて、邪魔しやがる！」

「まあまあ、落ち着けよ。それより妙だと思わないか？」

「何がだよ！」

「なんでナギの影ばつかなんだとかよ。少しはオレの影もいていいと思わないか？」

「それがなんだよ。」

「アイツって大体影の中にいるよな？つまり今ナギの影の中に入ってることじゃねえか？」

「【雷の斧】！！！」

あ、ばれたか。逃げないと！あつぶな、もう少しで死ぬところだった。うへー、さっきまで僕がいた場所が陥没してる。周りの木にも火が燃え移ってる。山火事にならないように倒しておかないと【百の影槍】（多数の影を槍のように同時に突き出すことが出来る）ふう、これでいいかな？

「捕まえたぜ！」

「よっしゃー！ラカンそのままやっちまえ！」

うわあああ、捕まった！掴まれた肩がギシギシいつてる！

「オラア！ラカン左パンチ！」

「脱出——！！！」

「なっ！？」

セフセフ、なんとかいつもの怪しい服を脱いで逃げれた……………
・。ああ、僕の—張羅が頭のところしか残ってない。

「おい、どういうことだよ。ガキが出てきたぞ。」

「知らねえ、けどこいつを倒さないとダメなんだろう？」

おお、久々に出てきたけど、すっごい体に違和感がある！急いで
影装でつくらないと！

「カゲおわった……………だれ？」

アスナちゃん、そういえば僕の本体知らなかったね。

++++

「・・・・・・・・カゲ？」

アスナちゃんは僕が気になるのか、いろいろ触ってくる。僕の病的なまでに白い肌とか、ちょっと伸び気味の灰色の髪とか、覇氣のない濁った灰色の目とか、穴があきそうなほど見てくる。

「カゲ・・・人だったんだ。」

「そろそろあの服きていい？」

「もうちょっと・・・。」

ふう、ぺたぺた触ってくるアスナちゃんはもう放っておこう。さてこつちを見ている紅い翼のみなさん、なんか相談してますね。

「どう思います？」

「どうって……姫子ちゃんもオスティアにいるときより元気そうだし、このままでいいと思うぜ。」

「どうやら姫巫女は操られてたり、洗脳されてるわけじゃないようだのう。」

「私もアルも無傷ですから、それほど悪い人物には思えませんね、それよりも子供二人にしてやられたほうがショックです……。」

「ま、そんなに気にすんなよ。アイツらはナギと同じだからしゃーねえよ。」

「むう、ワシだけぼろぼろだのう。ワシとしては姫巫女の方が危険だともうぞ、監視としてアヤツを付けておいた方が賢明じゃ。」

「私としてはあの隠密性は仲間に欲しいところですね。」

「よし！おい、カゲ！紅い翼に入れ！」

ふむ、なかなか個性的な人たちだ。ナギ（バカ）、ラカン（アホ）、アルビレオ（腹黒）、詠春（苦勞人）、ゼクト（大人）ってところかな？さっきまで交戦中だったのに、随分と好意的だね。子供って便利だなー。

さて返事はどうしようかな？僕としてはこの人たちのところにいたら安全な気がするけど、厄介なことに巻き込まれる気もするし……。

「アスナちゃんどうする?」

「おなかすいた。」

「・・・あー、皆さんも一緒にどうです?」

アスナちゃん的にはどうでもいいみたい、折角なので好感度上げも兼ねて赤い翼の皆さんと夕飯にすることにした。

++++

「カゲ、おかわり」

「即戦力ですね」

「ナギどつちが食えるか勝負だ!」

「負けねえ!」

「なぜシシリア風ピザが・・・。あれは唐揚げ?こっちは奉書焼か、なんの肉か分らんが」

「よく食うのう」

僕、戦争が終わったたら店開くんだ……なんてね。操影術が便利すぎるのが悪いんだよ。料理道具の殆どが再現できるし、【黒子】使えば勝手に作ってくれるし、【影重ね】使えば各国の料理人の動きを再現できるしね。

結局、僕は紅い翼と行動を共にすることになりました。特に僕は料理人兼アスナちゃんのお目付け役を任されることに、アスナちゃんの教育はみんなですることになりました。

アスナちゃんは、一体どこまで強くなるんでしょうね？

アスナちゃん暴れる（後書き）

戦力でいうと

ナギ ラカン>アスナちゃん 詠春・アルビレオ・ゼクト>>>
>>カゲタロウです

紅い翼の日々 1 (前書き)

ギャグパートです
短いです

紅い翼の日々 1

紅い翼……ナギ達と行動するようになってから、僕の間が増えました。皆がこぞってアスナちゃんを連れ出すようになり、僕以外の人たちとも親しくなっていくのを見て嬉しい反面寂しく感じるのは、親心というモノなんでしょうか？

さてこの暇な時間をいかに活用するか、それが今後の僕の人生を左右するでしょうね。だいたいこんなことをしていました。

さてどうしようかな？……地味に忘れかけてましたけど……僕の第一目的は復讐です。敵を知り、己を知れば百戦危うからず、ということで情報収集用の魔法を作成するために【黒子】の術式を改造してみました。

〓作成期間約三か月〓

「ついに出来た！名付けて【嗅ぎ回る影】……うん、もっとひねって【密影】にしよう。」

改めて紹介しましょう【密影】です。【黒子】から戦闘能力を排し、僕本体に聴覚と視覚を繋げたものとなっています。うんうん、

我ながらいい出来だ。あとは適当に蜘蛛とか鼠を模れば、完成つと早速行きたまえ！

．．．．．今ぞくつてした。さすがに百匹一気に放つとクルものがあるね。

ふむ、また暇になってしまった。【密影】に情報収集（復讐関係2割、料理関係7割、あとはその他）して貰ってるから、僕のしなければならぬことはないし、また何か実験しよう。

「．．．．．なにも思いつかない、アルかゼクトに聞こう」

「．．．．．また無駄話してしまった。研究しないと．．．。」

「．．．．．はっ、もうこんな時間か。夕飯の支度しないと！」

「うっむ、眠い．．．．．寝よう。」

僕の暇な時間は【密影】を作ってから大体こんな感じに過ぎていくのだった。

++++

アスナちゃんと僕

今日も今日とて研究の毎日です。題材はいつものように操影術、この影を媒体にした魔法はとても汎用性が高く、さまざまなことに使えます。しかし影であるために全般的に威力が低く地味なのが珠に傷です。

さて今日はどんなことをしようかな？

コンコンッ

「カゲ、協力して」

どうやら今日はそんな時間は無いようだ。

「どうしたのアスナちゃん？」

「またナギに負けたから、どうやったら勝てるか教えて」

最近、舌足らずだったアスナちゃんも段々と話すことに慣れてきました。知ってました？人間ってしばらく喋らないと、上手くしゃべれなくなるんですよ。

まあそれは置いて、ナギに勝つにはどうしたらいいかですか・
・・・・無理かな。僕じゃ勝てないからアドバイスのしょうが・
・・・・。

「真実はいつも一つ！簡単なことだよ。」

「それは？」

「いいかい——」

次の日、アスナちゃんは機嫌良さそうに僕の部屋に入ってきた。そのまま鼻歌でも歌いそうなアスナちゃんの髪は見知らぬ鮮やかな紅いリボンで、ツインテールにされていた。

「どうだった？」

「勝った」

「そうか良かったね、紅茶いれるよ。」

いつもより雰囲気の良いアスナちゃんを眺めながら、昨日どんなことがあったのか聞く。話しにきくナギはほとほと困り果てて、それはもう面白かったそうだ。

++++

おっすオラニート！

うむむ、困ったな全くアイデアが出ない。こうなったら他の魔法使いと技術交流をして模索しよう。

「アルえーもーん」

「なんですか、その？が付きそつな名前は」

「（・3・）あるえ〜？」

パーン（・A・）≡（）3（）

「なんの用です？」

その笑顔が怖いです。アルビレオさん。
アルが怖いので、ちゃんと話しを進めようと思います。

「・・・金髪」ボソッ

「幼女っ」キリッ

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「やはり同類か・・・。」

「今まで警戒して損をしていたのですね・・・。」

僕たちの熱い語らいは夜まで続き、不毛とも呼べる自らの性癖を曝け出した危ない会話は、偶然通りかかった詠春が止めるまで停まることはなかった。

次の日

クソっ、無駄に有意義な時間を過ごしてしまった！今日こそは研究のネタを貰いにいくぞ！待ってる！同志よ！

どたどたと荒々しい足音を立てて、アルの部屋に飛び込む。

「ブルマっ！」ガア

「ニーソックス？」キュピーン

「・・・・・・・・。。。」

「・・・・・・・・。。。」

「そこは生足だろうが！」

「そっちこそスパッツでしょうが！」

熱い・・・男の情熱がまたしてもぶつかり合う、二人の議論は交らず平行線を辿り、相容れない相手の思想を捻じ曲げんと口火を切る。

やがて二人の舌戦は転々と戦場を変え、時に分かりあい、時に争い、互いを高めあっていた。

「やはり詠春ははいてない派だと思うのですが・・・。」

「ああ、そうですね。あのムツツリは巫女さんが好きだから可能性は高いと思うな、まあ僕は断然ヒモパンだけだね。」

「フッフ、私はドロワーズまたはかぼちゃパンツですね。」

「アハハハハハ。」

こうしてまた僕は無駄に有意義な時間を使ってしまった。

翼の影

とある日、僕はいつものように【密影】から情報を得ていた。するとその膨大な量の情報からかなり重大な情報を見つけた。

「アルしってるか？大規模ワープ構想を利用したグレートブリッジ攻略のこと。」

「どういうことです？」

僕はいつものように世間話をするかのように、アルに話題を振る。困惑の表情を浮かべるアルビレオに、畳み掛けるように情報を与える。

作戦の詳細、帝国軍の規模、軍の内容、侵攻経路、作戦決行時間とイレギュラーによる変更日時、さまざまなことを嘘偽りなく、誇張しないありのままの手にした情報を流す。

「本当なのですね……なぜあなたがこれほどまでの情報を？」

「今は魔法世界全土を巻き込んだ、大きな戦争。物流は止まり、人の流れも途絶えてる。そんな中で情報だけが活発に動いてる。これほど観測しやすいことは無いよ。」

「貴方は一体……。」

「同士よ、言っておこう。そんなことは些細なことだね。」

僕に疑いを持ちつつも信じざるおえない確かな情報を知り、何かを考えながらアルはみんなが集まっているところにいった。

「すまないね、アル。少し利用させてもらうよ。」

僕は情報が欲しい、あいつらを打倒するための確かな情報が……
・……そのためには今情報が探りやすい今の状況はとも都合がいい、だから戦争が長引くように帝国と連合でバランスを取らないといけない。

それにしてもあいつら……完全なる世界の情報が全く手に入らないな。末端の情報は手に入るのんだけど、あいつらの思想、目的、構成員、組織の全容が分からないのがいたいな。

「カゲー、皆慌ててどこか行っちゃった……。」

「クフフ、置いてかれちゃったね。」

「カゲ、あそぼ」

「いいよ」

アスナちゃんと組手するのも久しぶりだねー、さてまずは僕らの戦力差を比較しますか。

僕、カゲタロウ（仮）

体力D 体術D 魔力B 抗魔B 技術A

戦闘スキル：操影術B

総合B - ラカン式戦闘力：280

アスナちゃん

体力A 体術S 魔力B 抗魔EX 技術B+

戦闘スキル：魔法無効化能力EX 感卦法A 地系統魔法B-

神鳴流B

総合S ラカン式戦闘力：4500

ふっ、もうこんなに差がついていたのか……。おかしいな僕魔法世界でも上位の術者なんだけど。

もう僕の【黒子】じゃ話にならないね。

「カゲ・・・弱くなった？」

「違うよ、アスナちゃん。君が強くなったんだよ、僕とは比べ物にならないくらいにね。」

「・・・・・・・・カゲ・・・・。」

「つとということで【黒子千人組手ダブルツインマーク？セカンド】
……長いな。よし改めて【黒子千日手組手】だ」

「？」

説明しよう【黒子千日手組手】とは！一体の【黒子】に相手から強制的に魔力を吸い出したものを与えて、さらに【影重ね】で相手を再現した。まさに相手と同等の影を生み出す、僕の切り札なのである！

「……！？咸卦法が使えない。」

「たまには気だけで戦ってみてもいいと思うよ。あとよそ見しない方がいい。」

「……うつ、カゲ？」

「それは真にアスナちゃんの影だから」

さて僕は研究でもしてるかな。アスナちゃんは魔力切れで倒れると思うけどね。

++++

アスナちゃんを寝かしつけた後、僕は自室に籠り魔法の鍛錬をしていた。部屋の明かりを消し、月明かりだけが光源となり、しつとりと静かな夜の訪れを待つ。

やがて虫の声さえしなくなるくらい夜が深くなり、僕の毎夜の鍛錬が始まる。

スウツ

『闇き夜の型』闇魔法の訓練の一つであり、最も古典的な鍛錬法である。普通なら昼に行う訓練法だが、僕は夜にやることにする。なぜ闇系統なのに昼に行うのかというと、単純に闇に吞まれないように日の光を気付けにするためである。

この鍛錬は自身の心の闇に触れ、引き込まれないように闇を拡張する。それ故に夜に行くと闇に吞まれやすくなり危険である。そのため原則として昼に行うようにされている。あえて夜に行う利点を上げるとすれば、闇の深くまで潜れるくらいか。

操影術を代表とする闇系統の術者は、魔法使い全体の割合として見たら非常に少ない。おおよそ十万人を切る程度しかないだろう。

しかし闇系統は後天的に目覚めることのできる。なぜなら誰しも闇を抱えて生きている。そしてそれは闇の精霊の好みの魔力であり、闇系統の魔法を使う上で欠かせない資質となる。まあ、大抵後天的

に目覚めた奴は闇に吞まれるけどね。

僕の一族みたいに先天的に闇の資質を持つ人は少ない、生まれながらにして心の闇を好む闇の精霊に好かれる人種ってことだからね。

「カゲ……。」

「っふう、起しちゃったかな？」

いけないいけない深くもぐり過ぎて、アスナちゃんが近づいてることに気が付かなかったよ。枕を持ったアスナちゃんが僕の部屋に來たってことは……。

「……………一緒に寝てもいい？」

「いいけど、久しぶりだね。もう一人で眠れるようになったと思っただよ。」

「子ども扱いしないで」

「冗談だよ、おいで眠くなる話をしてあげよう。」

「……明日は負けないから」

「次は自分に勝ってね。」

さて何の話にしようかな？そつだなオスティアの伝説なんてい
いかな、

++++

グレートブリッジを無事奪還した紅い翼は、今まで帝国に押され
気味だった連合の戦況を次々に覆していった。

僕とアスナちゃんが隠れ家でぬくぬく鍛錬を積み重ねてる間に、
ナギ達は戦場を転々として此処に帰ってくるのも稀になるくらいだ
った。

「誰？」

「ガトウってんだ。よろしくな、アスナちゃんにカゲ。」

「僕はオマケ扱い……………」

新しい同行者が増えた。オッサンと子供3人である。オッサンこ
とガトウ・カゲラ・
ヴァンデンバーグは、今紅い翼協力しているメセンブリーナ連合の
捜査官で、上から派遣されてきた正義感の強い人である。

派遣されてくる人物を指定したのがアルビレオである点から彼が信用できる人格者であり、僕のことを調べるためなのは明白である。なんせグレートブリッジ奪還直後に増えたからな。

僕とアスナちゃんが部屋でオセロに興じていると、隠れ家のラウンジからナギの声が聞こえてきた。少々感情的な声なので、少し様子を見に行ってみる。

「俺の故郷のある旧世界じゃ、超強力な科学爆弾が発明されてこんな大戦はもうおこらねえそうだ。戦を始めたら最後みんなまとめて滅んじまうからだってよ。」

「だがこつちのこの戦はいつ終わる？帝都ヘラスまで攻め滅ぼすってか？」

「やる気になりや、この世界にだって旧世界の科学爆弾以上の大魔法はある。こんなこと続けてどうなる？意味ねえぜ！！まるで・・。」

「——まるで誰かがこの世界を滅ぼそうとしているかのようなのですか？」

小便臭い子供のようなこと言いつつもこの戦争の裏に蠢くものを感じ取っているナギに、なにかを確信した様子のアルビレオ、そして

「——ある意味その通りかもしれないぞ」

「ガトウ」

「俺とタカミチ少年探偵団の成果が出たぜ。やはり奴らは帝国・
連合双方の中枢にまで入り込んでいる秘密結社『完全なる世界』だ」
コスモエンテレケイア

そこからはガトウが掴んだアイツらの情報だったが、目新しいものは無く特に興味もないのでどうでもよさそうにしているラカンに
なんでナギの機嫌が悪いのか聞いてみる。

「ラカン、なんであんなにナギの機嫌が悪いんだ？」

「なんだお前も興味ないのか？」

「別に」

「ふ〜ん、そうか。ナギの機嫌が悪いのは多分アレだ、この前戦
場で帝国側の兵士に子供がいたんだよ。そのせいじゃねえの？」

アスナちゃんを見ながら言うラカン。なるほどね、反則なまでに
強いけどまだ13歳ということか。旧世界の出身らしいし、きっと
平和なところで育ったんだろうな。

僕がそんなことを考えていると、もうガトウの話が終わったのか。
アルビレオが話しかけてきた。魂胆が見え透いてるよ。

「カゲ、貴方はガトウが掴んだ情報以外に何か知っていますか？」

「いや大差ないね。ただ……。」

「ただなんです？」

「僕が此処まで探って何も出てこないとなると、アル達でも齒が立たないレベルのものかもしれない。」

これでアルビレオがどう思うか分からないが、アイツの性格上まだまだ疑ってるだろうね。完全に味方だと判断しない限り、アルは疑い続ける。けど直接僕を調べるガトウは違う、きっと彼のことから僕の境遇に同情してくれるだろう。

数日後、ガトウの紹介でナギ達はウェスペルタイア王国の王女アリカ・アナルキア・エンテオフュシアと接触したようだった。

基本的に僕とアスナちゃんは隠れ家にいるので、会うことは無いと思っていたが、王女たつての願いで僕たちはメガロメセンブリアまで向かうこととなった。街についた僕らは直ぐにナギ達と合流し、王女と会う運びになった。

最初は二人で会う予定だったが、僕は会うことを遠慮し、後で紹介されることになった。なので僕は彼女とアスナちゃんが、どんな会話をしたのかは知らない。

「カゲ・・・・・・・・。」

「どうしたんだそんな陰気そうな顔をして」

「カゲは何で私といえるの？」

「それは・・・・・・・・。」

「それは私たちも聞きたいですね。」

「そうだぜ、さつさと吐き出しちまえよ！仲間だろ？俺たち！」

アスナちゃんが彼女に何を吹き込まれたのか知らないが、どうやら僕に対して不安を覚えてしまったようだ。正直、ここ（紅い翼）に居てもアイツらを打倒することが出来ないと感じている僕は、ここでアスナちゃんを突き放して縁を切った方がいいと思い、口に出そうとした。

しかしアルビレオとナギ、ガトウが現れそのチャンスは潰えた。アルビレオは僕を完全なる世界の手先じゃないかと考えていて、ナギは僕を仲間として見ていて好意的だが、アルビレオに吹き込まれたのか疑念が生まれている。そしてガトウは疑念を持ちはしているが二人より一緒にいる期間が短いので、中立的な第三者の立場にいる。

困ったことに下手なことは言えないようだ。

「カゲ、貴方のことを少し調べさせてもらいましたよ。ハオン・ルルド・サスラ、代々帝国に使える操影術の名家の生まれであり、サスラ家は裏では相当の黒い一族のようですね。」

「僕がここに居る理由？そんなの簡単だよ復讐さ！」

「復讐？連合にですか？戦争で死んだ一族の仇を討つとでも？」

「フツ、アルビレオそれは帝国・・・いやアイツら（完全なる世界）のカモフラージュだよ。知り過ぎた人たちは連中に悉く消されてる。僕の両親のようにね、嘘だと思っただけなら調べてみたら？」

「・・・・・・・・。」

少々熱くなってしまった。・・・アルの反応が悪いな、もしかして謀られたか？・・・・・・・・クソやっぱり、アルの口元が緩んでる。わざわざ言質を取るために、こうしたのか。全く、ここまでしないと安心できないとは、アルも歪んでるな。敵じゃないことは最初から分かってたくせに。

「お互い、損な性分ですね」

「みんながみんなナギみたいに馬鹿なら楽なだけだね。」

「この野郎！誰が馬鹿だ！」

「さっ、皆さん行きますよ。ナギの馬鹿がうつりますからね。」

「アルッ！てめー！」

アルがナギをからかって場を和ませていく、どうやらこれ以上踏み込むつもりはないようだ……。ああ、分かってるよ。アル、そんな目で見なくてもね。持ちつ持たれつが僕と君たちの関係だからね。

「カゲ……。」「

「アスナちゃん、君から一緒に行こうって言ったんだろっ？」

「あっ……。」「

「君の旅の終わりまで付き合っさ」「

「うん」「

なんにしてもまだまだアスナちゃんとの旅は終わらないみたいだね。

翼の影（後書き）

主人公の名前が露出！でももう出てこないかも

紅い翼な日々2 (前書き)

紅い翼な日々2

クルト・ゲーターの憂鬱

最近、紅い翼に入ってきたクルトとかいう子供が、僕の弟子にしてくれとうるさい。どうやら僕が行っているアスナちゃんの修行を見て、操影術を会得したいらしいのだが、僕は断った。

「カゲタロウさん！僕に操影術の手ほどきをお願いします！」

「断る、大体君は詠春に神鳴流を習っているじゃないか。」

「僕には貴方の操影術が必要なんです！あの姫巫女の猛攻を柳のように流せる貴方の技が！」

「搦め手は所詮搦め手だよ」

毎日この調子なのでほとほと呆れる。僕なんかよりも他にいるだろうに、アルビレオとか多分嬉々として教えてくれるぞ？アイツは身内に甘いからな、性格が歪みそうだが。

「カゲタロウさん！」

「もういい、はつきり言う。君には操影術は無理だ、才能がない。」

「死ぬ気で頑張りますから！」

「無駄だ、ここには鍛える設備も教える人材もない、ましてや才能の無い君を闇の使い手にするのは時間の無駄でしかない。僕に泣きついている暇があったら、剣でも振ってるんだな。」

そういつて僕は突き放した。突き放した筈だったんだが、どうやらこの少年蛇よりしつこいようで、どこで覚えたのか知らないが操影術の基本である、自身の影を操作する魔法を会得して僕に見せてきた。

「それでもダメですか！」

「とんだ馬鹿野郎だな」

「……………ダメですか？」

「ついて来いおいで、そんなんじゃ操影術とは呼べない」

「……………はい！」

早速、部屋に戻りクルトにアイマスクとイヤーマフ（射撃の訓練の時につけるヘッドフォンみたいなもの）を渡す。

「これは？」

「本当なら光の入らない暗所に一か月は閉じ込めるんだが、まあ前には他にもすることがあるからな。これ僕が外していいっていうまで、取っちゃだめだから。」

「ずっとですか？」

「ずっとだよ。影の中は視覚、聴覚、嗅覚、触覚を感じることが殆んどない、そんな中で時間の経過、周りの距離感、自我の崩壊を防ぐにはてつとり早く体験するのが一番だ。だからまずは視覚と聴覚から削っていくよ。」

こういう訓練だから止めておいた方が良かったのに、でも死ぬ気でヤルって言ったのはクルトなんだよ？そんな顔しなくてもいいよ、どうせ嫌でも後悔するんだからね。

弟子は暇つぶしの道具

「だから言ってるだろう？五感を縛らなくては操影術の修行にならないと」

「しかしですね。それではこちらとしても稽古にならないんですよ。」

「じゃあ、一か月クルト貸してよ。」

「嫌ですよ、折角楽しくなってきたんですから」

詠春も分からん人だな、まだ五感を全部縛ってないんだぞ？それなら稽古のやりようはいくらでもあるだろうに、例えば体に叩きこむとかさ。

「何やってんだ？」

「あつ、ラカン聞いてくださいよ。」

暇そうなラカンが声を荒げてる僕たちに気づいて、ラウンジまでやってきた。詠春がラカンに事情を話すと、呆れたようにラカンはどっちもやりやいいじゃねえかと言った。

「簡単だろ？クルトを暗い所に閉じ込めて、詠春が鍛えるだけだろっ？」

「その手があったか」

「まあ、声が届けばなんとかなるか」

「にしてもお前ら楽しそうだな。オレも混ぜろ」

「好きにすればいい」

どうやらクルト少年は24時間、暗所での修業が決定したようだ。可哀そうに、ラカンのことだから組手しかないぞ。怪我されたら困るから、アルにも声を掛けるか。

「いいですね、彼は器用なので重力魔法も教えましょうか。」

「何の話した？」

「ナギか、今僕たちはクルトを弟子にして遊んでるんだけど、ナギもどう？」

「面白そうだな、よし！オレも参加するぜ！」

「クルト……。」

「クルトも可哀そうにとんでもない奴らに目を付けられて……。」

「

ガトウが何か言っていたが、まあどうでもいいか。とりあえず、肉体的の安全は確保できたな。

++++

監禁修行が一月もすると、クルトの精神は擦り切れていた。

「……………」

「クルト君、野生の動物のようになってるね。」

「これ大丈夫なのか？」

「これ詠春の厳しい稽古のせいだよな？」

「大体はナギとラカンが遊び過ぎたせいですけどね」

一か月ぶりに外に出たクルトは野生動物のように、僕たちを警戒しながら距離をとる。その手には木刀を持ち、操影術で鎧のようなものを形成していた。まあ、予想通りだね。見事なまでに精神が崩壊しかけてるね。

さて第二段階に入る前にクルトの自我を強化しないとね。

「じゃ、今日は僕が担当するよ。」

「おいおい、大丈夫なのか？」

「ナギ、大丈夫ですよ。闇の魔法で重要なのは心の闇、例えばトラウマなどです。」

「あー、だからカゲとアルは思いっきり苛めてやれって言ったのか、納得だ。」

影の手で取り押さえられたクルトに強烈な暗示を掛ける、そのあとに気付けの薬を飲ませて起こす。うつ、僕はとか言ってるクルトを引っ張り起こして、操影術の教本を渡す。

第二段階は知識と技術を教え込むだけで終わりなので、あとは詠春に引き渡す。

「えっ、終わりなんですか!？」

「うん、そうだよ。僕もここまでしか、教えられてないし、後は実践あるのみさ。じゃあ、当たって砕けてね。コツとか、概念は本に書いてあるからね。」

「ちょーじゃあ、組手すっか!」ええ!助けてカゲタロウさん!

「分からないところがあつたら聞きにおいで」

クルトのやつ早速後悔してる顔をしてるね。まあ、僕がしたことと言えば、トラウマを作るためにナギとラカンを使っただけくらいか、だから神鳴流だけに絞れば良かったのにね。

クルトのことは皆に任せようか、魔法全般はアルが担当してるし、練習相手は充実してる。あとは自分で研磨を積むだけだよ。さあ、アスナちゃんが拗ねちゃわないように機嫌をとらないとね。

探究心

最近は部屋にクルトが避難してくるので、あまり切り札の作成に着手ができない。夜くらいしか時間がないのだが、夜は僕の修行時間、なんだが時間が足りなく感じてきたので、ある物の作成を決意する。

【ダイオラマ魔法球】

どこぞの王宮くらいにしかないと言われる、超レアなアーティファクトである。アリアドネーの禁書指定の書庫に入っていた錬金術の魔道書を参考に作成し始めたのだが、完成までに非常に時間がかかることが分かった。

まず魔法球の作成、これは魔力伝導率と万が一を考えたときのため、ある程度の強度が必要であり、材料もそれなりに希少なものを使う。

次、魔法球に異界を築くための魔法陣を魔法球に刻む。魔法陣を刻むために特殊な工具とインクが必要、しかも少しのミスも許され

ない。少しでもミスがあれば、魔法陣は成立しないので、大量の魔法球を使うことに。

次は外と魔法球との時間の流れを変えるために必要な術式の構成とそれを定着させるため、実際に魔法球の中に入り、調整を行う。

魔法球の稼働のための恒久的なエネルギー源の調達（本来は賢者の石と呼ばれるものを使う）そして魔法球の中にジオラマを作る。

最後に調整をして完成となる。

「僕は作り方を本で知ることが出来るけど、最初にこれを作った人は化け物だな。完成までに何年かかることやら。ん・・・これはアスナちゃんか・・・。続きはまた今度だな。」

ズブズブと作りかけの魔法球たちを影の中にしまう、不用意にアスナちゃんが触れて魔法陣を消されると困ったちゃうからね。

「カゲー、クルトが助けてだつて」

「大丈夫だよ、放っておこうか。それより最近アスナちゃんもアルに魔法を習ってるみたいだけど、順調かな？」

「うん、クルトより筋がいいって」

クルトは本当に運がないね、ここにいる連中は僕を除いて化け物みたいなだからね。他の騎士団とか軍なら、クルトも最強になれたかもしれないのにな。

にしてもアスナちゃんがアルから習ってるのは重力魔法、つまり空中にいる敵を叩き落として、下から地系統魔法で凶悪なコンボが出来るということか、胸熱だね。

このまま鍛えていったら、もしかしてアイツらを片手で捻れるくらいのとんでも娘になるんじゃないかな。ちよっとワクワクしてきた。魔法球が出来たらそこで修行させるのもありかな。

「カゲ、私も操影術覚えたい」

「ん、やめておいた方がいいよ。あれを究めようとするより、自分の得意なことを伸ばした方が強くなるし、下手したら死ぬか魔獣になっちゃうからね。」

「そっか………。」

「アスナちゃんは焦らずにじっくりやったらいい、ゆっくりやってもものすごい速さで成長してるからね。」

「うん、分かった」

「いやー、いい子だね。僕やクルトみたいに擦れてなくて素直だ、

このまま育ってほしいもんだね。

紅い翼な日々2（後書き）

ダイオラマ魔法球の設定がどうなっているのか
分からないのでまた独自設定を投入

カゲの趣味は情報収集と新術研究です
研究の内容は大半は役に立たないものです

アスナちゃん捕まる

グレートブリッジ奪還は連合にとって非常に大きいものだった。なにせ帝国はあの要塞までワープするという奇策に出たのだから、その策を破られた以上当然相応のリスクを負うこととなり、一気に戦況は一変連合の優勢になる。

連合が優勢になったことで、無理に戦場へ出る必要の無くなった紅い翼はしばしの休暇を楽しんでいた。まあ、楽しんでいたのはナギやラカンといった脳筋で、他のメンバーは完全なる世界の独自内偵を行っていた。

「アル、ナギが面白いことになってるよ」

「はっ？」

僕もアルに頼まれて情報の提供を行っている最中、ナギとアリカ王女が完全なる世界の下部組織を襲撃し、メガロメセンブリアの執政官がテロに関与している証拠を掴んできた。

事態は動き出す、ガトウはマクギル元老議員に連絡を取り、執政官を弾劾することで戦争の休戦を狙い、アリカ王女はこの戦争の中国の保守派である第三皇女と接触をとることにした。

どちらも成功すれば、この戦争は終わってしまう僕は邪魔をするかどうか悩んでいた。いや悩む必要は無かった。

こちらの協力者であったマクギル元老議員は敵が成り代わっており、アリカ王女は第三皇女とともに乱入者に捕まり、僕たちは完全なる世界に襲撃された。僕らは逃げるときに、バラバラになり追ってから逃げていた。

「完全にタイミングを計られてたね、アル達とゼクトは無事合流地点に着けたかな？」

「大丈夫、こっちが本命」

「だよね」

僕が前、アスナちゃんが後ろを見ながら最初に決めてあった合流地点を目指す。追手を撒く方法は心得ているので、スグに引きはがすことが出来、会話する余裕が生まれていた。

「あれはゼクト？」

「ゼクト！」

追手を撒いたのか、敵を探すように確認をしているゼクトを見つければ、アスナちゃんが声を掛けた。先行する僕はゼクトに違和感を持

っていた、あんな黒い鍵のような杖を持っていただろうか？なぜこちらに近づいてくるのか？どうしてゼクトの逃走ルートから外れた此処にいるのだろうか？疑問が渦巻く。結果は直ぐに分かった。

「リライト」

思わず操影術で防御したが一瞬で消され、伸ばした右腕が消失していく、クルトと同じ生への執着を暗示付けられた僕はその暗示に従い、生きるためにもがきはじめる。僕の知覚能力が増大し、どうすれば生き残れるのかを考え実行する。

右半身の大部分を持つてかれた僕の取った行動は、背後にいるアスナちゃんに特攻し、僕に起こっているこの現象を消すことだった。

「カゲ！？」

「・・・・・・・・流石じゃ」

その目論見は上手くいき、僕が消えることは無かった・・・・・・・・しかし時間の問題だ。顔の半分まで消えかかっていた僕は死にかけていた。アスナちゃんとゼクトが何を言っているか、分からないただ生きるために僕はもがく。

「カゲ・・・・・・・・なにそれ・・・・・・・・！？」

「自ら闇に堕ちるか、姫巫女、わしについてくるならカゲのその魔獣化と体を元に戻そう。」

「・・・・・・・・分かった。」

『――』

声が聞こえる

++++

長い悪夢を見ていた気がする。
どんな夢だったかな。

「ふあ・・・・・・・・顔洗わないと」

僕はサスラ家当主である父上、ルドラー伯爵の長男であり、帝国を裏から支える影の一族の末席を担うべく修行中の魔法使いです。

『ハオン、どうしたの？具合でも悪いの？』

「母上、大丈夫です。少し夢見が悪かっただけです。」

『そう、無理はしないことよ。やっと修行も終わるのだから』

「はい！母上、僕も父上のように役目を果たしたいと思います。」

母上は口元以外の肌が見えないように操影術で影を纏っているの
で、一族の中ではわりと表情の読み易いひとです。

そうそう、やっと僕の修行が終わるみたいです。長いあの訓練が
終わり、今日僕は第四段階の最終試験を受け、晴れて一族の仕事に
就くことになります。

ちなみに第一段階は夜の行という暗所での生活になります。第二
段階は知の行といい主に座学を学び、操影術を習得していきます。
第三段階は陰の行です、これは僕の一族に伝わる技法の習得になり
ます。そして第四段階は錬の行となり、実践的な戦闘訓練になります。
す。

「さて準備をしておくか、相手は誰かな？」

『兄さん！おはようございます！』

「ああ、ルルドか。おはよう、そっちは順調かな？」

『全然です。僕はまだ陰の行ですから、僕に比べて兄さんは凄
いです！もう修行が終わってしまうんでしょう？頑張って、兄さん！』

「うん、頑張るよ。」

ルルドというのは僕の双子の弟で、一族にしては明るい性格をしているカワイイ奴だ。昔っから僕は・・・弟が・・・欲し・・・くて・・・。

『兄さん？』

「ルルド？・・・僕の弟？」

『兄さん！？大丈夫？顔が真っ青だよ！？』

違う、ここは違う。ここは僕の家ではない、弟がここに居るわけがない。

ルルドは僕が第三段階の蠱毒の行で殺したんだから、僕が背負っているものだから、いるはずがない！

「出口を探さないと・・・」

『兄さん？どうしちゃったの？』

「ルルド、僕には果たさなくちゃいけないことがあるんだ。」

ルルドの動きが止まった。さっさとここから逃げ出さないといけないね。逃げることに關しては、僕は誰にも負けないよ。

「【Only one bright way 暗影重なりて
形を生し 形影積もりて 密を生し 杯中蛇影 穴を見つけよ 影
穴】」

僕の手から出てきた小さな影の球は空間を歪め……無かった。どうやら僕は魔法で作られた空間に閉じ込められたのではなくて、夢の国に入れられたようですね。さてどうやってここを抜けだそう？

++++

影使いの少年が幽閉されていた牢屋、そこには子供の分断された四肢だけが残されていた。床に張り付けられた手足は、持ち主を無くしたオブジェとなり、床を赤く染めていた。

「……レプリカとはいえ完全なる世界から抜け出したのか……」

「どうやらまだまだ調整が必要なようみたいポヨ。」

「どうやらただの魔法使いではないようだね。千の呪文の男とは違う意味で厄介な人のようだ。」

ローブを深く被った小柄な人物は残された手足に刺さっている杭を抜く、その杭には血はついておらず、また刺さっていた手足にも穴は空いていなかった。

「生命活動ができるギリギリのラインまで魔力を奪っておいたはずだけど……。」

「次は本物を使った方がいいポヨ、この切り口に魔力の残照があるから」

ローブを被った人は考える、絶対に不可能と思われた術から脱出し、自らの四肢を切り落とすという選択を迷いなく実行し、今死の淵に立ちながら虎視眈々とこちらを狙っているだろうあの少年のことを。

アスナちゃん捕まる（後書き）

ちよつと短めですね

そして初めてのカゲ以外の視点

& トカゲの尻尾きり

地味に壮絶な脱出劇（前書き）

グロ注意

地味に壮絶な脱出劇

僕を閉じ込めている正体不明のこの空間を調べ始めて、どれくらいの時間がたっただろうか？本来の空間との時間のズレはどれくらいなのか、ぼくには確かめる手段は無いが、少し分かったことがある、

この空間はどうやら僕の願望や後悔から作られた僕の理想の世界だということです。僕の人生のどの時期が、もっとも幸福に満たされ暖かな世界か僕の記憶から計算されて構築されていくようです。

「ネバーランドなんて糞喰らえってね。」

この世界を出るための正しい鍵を見つける、または無理やり破壊する、もしくは術式のコントロールを此方が得る。このどれか一つを実行しないと脱出は不可能、さてどうしたものか

・・・願望・・・希望・・・夢か、もしかしてこの世界は欠乏感利用法を使ってるのかな？それなら転換法を使えば、望んだ結果を作り出せるかもしれないね。

想像するのは出口を開ける鍵、この絡みつくようなぬるま湯の世界からの出るための出口、僕の今を成す過去の出来事との相違点、

僕を補完する完全なる世界。

「ルルド、僕の願いを聞いてくれるかい？」

『――』

「ああ、君との約束を守るために僕はここをでないといけない。」

『――』

「ありがとう【Audacia・Paula（わずかな勇氣）】」

『兄さん、頑張つて』

止まっているルルドに触れるとそこから光が漏れるようにひび割れていった。去り際に聞こえた弟の声はきつと僕の願望が生み出した幻影に過ぎないのだろう。

「うつ………ここは？」

見知らぬ天井を仰ぎながら僕は夢から覚めた。冷たい石畳が体温でぬくくなっている。天井には蜘蛛の巣がかかっており、掃除の類いはあまりされていないようだ。

体が動かない、身体感覚がないとかそういうことなく、物理的に動きを阻害されている。唯一動く首を動かして、自分の状態を見る。

「手のひらに杭が刺さってる……キリスト？」

刺さっている割には血も出ていなく、痛みも感じないどうやら魔術的な道具のようだ。足の方にも縫い止められたように動きが阻害されているので、足にも杭が刺さっているみたいだ。

「僕……裸じゃん」

基本的に操影術で服を纏っているので、それが脱げたらマッパなのはいいが、なぜ服ぐらい着せてくれなかったのだろう。一回囚人服みたいな着たかったのに。

気を取り直して服を纏おうとするも

「魔力が足りない……この杭が僕の魔力の殆どを吸っているのか」

杭のほかには特に僕を拘束しているものは無さそうだな。くっ・
・抜けない、杭を抜くには僕の筋力じゃ、無理みたいだ。

どうする？このままここで助けを待つか？それとも……
さっさと逃げないとアイツらが来そうだな。しょうがない、自傷癖
なんてないんだけどね。

「【影の剣】……魔力が足りなくてノコギリみたいに荒
いな。」

……できる、僕はできる。自身を持て、手足なんか必要
ないんだ。そう僕には操影術がある、ちゃん切っても影で作ればい
い、だから問題ない。まずは左足から……。

一気に切らないときつそうだな。

「うん ンギギギッ、オオオオ……。」

……はっはっは、あっ放心してる場合
じゃないな。急いで傷口を影で固めないと……おいおい、また剣
が荒くなってるぞ？もしかして段々きつくなってくるのか……。

右足――

左手――

最後は右手……あー、もう駄目だ。刃が荒すぎて、斬り始
めたら血と肉がズタズタに飛び散って、骨斬るときとかゴリゴリ音

がなって意識が飛びそうになる。まあ、トンでも痛みでスグに起きるんだけど。

右手――

「アア、アアアア、ア、ア、ア、アああ・・・ああ・・・」

あう・・・。

うう、切れた。全部切った、僕の手足全部切っちゃった・・・。

傷口が燃えるように熱い、今なら焼き土下座も耐えられそうだよ。フフ、あの杭から外れたら徐々に魔力が貯まってきた。これなら影の中に入れそうだね。

もう休もう・・・体が寒くて・・・眠たいな。熱くて寒いよ。

「――」

「――」

「――の男とは違う意味で厄介な人ようだ。」

うつ、誰だ・・・近くに誰がいるのか？

「生命活動ができるギリギリのラインまで魔力を奪っておいたはずだけど・・・。」

「次は本物を使った方がいいポヨ、この切り口に魔力の残照があるから」

小さいローブの人と褐色の女の子が、この会話の流れからすると僕をここに入れた人達みたいだね。うーん、どっちも僕じゃ手も足も出ないね。

「それにしても部屋が酷いことになってるわ、まるで猟奇殺人でも起きたみたいに血が飛び散ってる。」

「・・・・・・・・・・。」

「全く正気の沙汰じゃないわって聞いている？」

「ああ、すまない。さて戻ろうか？」

敵に呆れられるほどなんだ、さつきは意識が朦朧としてたからあんまり部屋のこと憶えてないんだよね。あつ、消えた。転移魔法かな？じゃあ、こっから脱出しますか。

++++

アイツらの基地から無事に脱出した僕は三日ほど寝込んだ、手足を失って精神的に参ってしまったのか、偽名でホテルを取って、完全に魔力が戻るまで部屋にいた。

僕の魔力の総量は手足を失う前と比べて30%ほど落ちてしまっている。これはかなり手痛いことだ、ただでさえ多いとは言えないのに、減ってしまうとはね。どうにかして魔力を増やす手立てを見つけないといけない。

「ナギの奴、指名手配されてるよ。ほかの皆も賞金がかかってるみたいだね。」

どうにかしてアイツらと連絡を取りたいが、あっちにはゼクトがいるから僕が裏切ったとか吹聴してるかもしれないし、してなくても接触するのは不味いだろうな。

当面はアルビレオと裏で接触することと、完全なる世界の情報をかき集める必要があるな。折角、アイツらの秘密基地が分かったんだし、そこから芋づる式に行きたいところだ。

さて折角オスティアまで来たことだし、またしばらく王様の影で

ゆっくりさせて貰おうか。

「（前より何か王宮が暗いな）」

ああ、そうか。黄昏の姫巫女に王女までいなくなっただもんな、
なんというかオスティア全体が暗い感じだな。

「・・・・・・・・。」

王様はいつも通り目が死んでるね。絶対これ操られてるよ、玉座
から微動だにしないもん。不気味この上ないね。

地味に壮絶な脱出劇（後書き）

さてカゲはこれから孤軍奮闘ですね

欠乏感利用法というのは現実で欲求不満状態を作り出して目的の夢を見ようとするテクニックです。リアルで満たされない状況を夢で補う感じです。

転換法とは見ている夢を認識して夢を自分の好きなように変えることです。例えば人に追われる悪夢を見たなら、追ってくる人が落とし穴に落ちることを想像するというものです。

詳しくは夢のコントロールで検索してください

呪いの影人形（前書き）

三か月と六日ぶりですね。

それにしてもあの展開は無理がある気がします。

呪いの影人形

アラルブラの隠れ家

完全なる世界の罫にはまり、私たちは世界中に賞金首になり、アリカ王女は行方不明、さらに姫巫女とカゲも敵の手に落ちたと考えていいでしょう。

これはかなり厳しい状態だと言えるでしょう。私たちが賞金首になるのはいいとしても、アリカ王女と姫巫女の喪失、ナギもかなり参っているようで、とにかく今の状況を打開せねばなりません。

しかしどうやってあの二人を捕まえることが出来たのでしょうか？ 姫巫女の能力とカゲの頭のキレ、この二つの相性は抜群に良くて下手するとナギでさえ遅れをとりかねないのに・・・今結界の中に何かが入り込みましたね。少し見に行きますか。

皆が完全なる世界にしてやられてピリピリしている中、外に出ていく。ガトウが何か言いたげにこちらを見ていたが、どうせあのことでしょね。でもまあほっといても問題ないでしょう。

ふう、夜風が気持ちいいですね。そこらへんでもブラブラ散歩しましょうか。

・・・誰か着いてきてますね。これはあの子と――

「おや、猫ですか？でもそれにしても少々不格好ですね。」

『分かっているくせに』

「随分とまあ手酷くやられたみたいです。この急ごしらえの結界に掛かるなんて、いったい何があったんです？」

『奇襲・・・なのかな？まあ、隙を突かれたのは確かだね。そっ
ちも面白いことになってるね。』

「ふふふ、そうでしょうか？たかだか二大勢力から指名手配されているだけでしょ。そんなことよりもあなたは何処にいるんですか？できれば協力してもらいたいです・・・。」

『オスティアさ、アイツらの拠点の一つがあそこにあってね。そこから脱出したところだよ。すまないけど、今僕は手を貸せないな。』

今微かに服の擦れる音が聞こえましたね。しかし思っていたよりも隠行が堂に入ってますね。じつと息を殺してこちらを窺うあの子に私たちは全く反応しない。

「そうですか・・・ではこれで」

『アル、いいことを考えた。』

「私には嫌な予感しかしませんけど?」

『アイツを使おう。』

アイツ?・・・ナギ達ではないようですな。少しだけ、ほんの少しだけカゲの目があの子の方を見ました。しかしあの子をどう使うんでしょうか?どう考えても現状を覆すのは厳しいと思うのですが・・・。

『おいおい、アルよ。なにも今の話じゃないぞ、にぶちん。僕たちの敵は誰だ?』

「・・・フフフ、そうでしたな。ということは私たちは表から派手に追い立ててやればいいんですね。」

『クフツ、やっといつもの調子になったな。僕たちは裏と影から粛々と進めるよ、勿論そっちのサポートも微力ながら貸そう。』

「頼もしい限りですよ。それではまたお会いしましょう。」

『ああ、くれぐれも気を付けてくれ。』

そういつて黒猫はさきほど音がした方に消えていきました。それにしてもいつもながら回りくどいメッセージですね。

一つ目のメッセージは話をぼかしてさも重要な話であるかのようにして、敵のミスリードを誘いつつ、私に身内に内通者がいるこ

と暗に示しています。

二つ目はオスティアという言葉、これはフェイクで、今彼はメセンブリアの行政府に潜んでいるでしょうね。あの子を使うために。

他にもメッセージが隠れてますが、それはいいでしょう。私はカゲとそれを追うあの子を見送りながら、ため息をつく。

カゲは気づいてないでしょうけど、私たちがピリピリしてたのは、貴方の料理が食べれないからです。毎日、一流の料理を食べていたのにいきなり生ごみのようなものを食べるこっちの身になって欲しいものです。

++++

アルビレオと別れたあと、後ろから僕を付けてくる人を誘導しながら結界を出る。結界の中にはアルビレオが仕掛けたえげつない罠が多数設置されているので、細心の注意を払って動かなくてはならない。

無事結界を抜けた僕らは久しぶりに顔を合わせる。

「カゲタロウさん・・・無事だったんですね。」

「ああ、心配させたみたいだね。」

「やっぱり私のせいで……。」

僕を追ってきたのはガトウが連れてきた三人の子供の一人、とても無口な子でこうして口を開けることは滅多にない。

「いや、君のせいではないよ。元から狙われてようだし。」

「でも……。」

「千草！」

「う、うめんなさい……。」

彼女の名は天ヶ崎千草、異世界にある日本から来た術師たちの遺児だ。本来なら日本で平和に暮らしているはずの彼女がなぜこんなところにいるのか、それは彼女の持つ特異体質にある。

彼女に宿る力、言霊は常軌を逸している。それも軍事転用可能なほどに、彼女が呪えば地が痩せ、天が荒れる。大きな力があれば神と呼ばれるものも操れかもしれないほど凶悪だ。

きっと彼女の両親は千草がこちらに来ていることを知らずに死んでいったはずだ。なら話は簡単だ、彼女に一声かければいい『両親はアイツらに殺された』と、そうすれば彼女は自然と敵を恨み、呪うはずだ。

「僕の目を見る、千草。．．．よいい子だ、じゃあもつと落ちて着ける場所で話そう。」

「カゲタロウさん．．．。」

故にこの子の扱いを絶対に間違えてはならない、懇切丁寧に扱い飼育殺しにしなければ、この身が滅ぶそいう力だ。

「私を使っつてどういことですか？」

彼女はとても頭が切れるし、感もいい。先ほどの会話の中から内容を把握し、理解することができる。ここで下手のことを言つとたちまち僕はこと切れてしまうだろう。

だがもしここで煙に巻いたり、嘘をついてしまえばそれに感ずいて取り返しのつかない疑念を抱かれてしまうだろう。

「簡単なことさ、アスナが危険な目に合わないと願ってくれればいい。」

「．．．。」

「ついでに僕も無事を願ってくれば嬉しいな。」

「．．．誓いますか、『命を懸けて』。」

「誓うよ。」

これでもし背後に佇む契約の精霊に違約だと判断されたら、僕はお終い。逆にいえば彼女を無下にしなければ、幸運の女神がついていると思える。まあ、その内言霊の力は制限しないかね。

それでは血を血で洗う政争に首を突っ込もうか。

千草ちゃんとカゲの出会い

わたしがカゲタロウさんに出会ったのは、両親を失い、魔法使いに騙されていたことを知って世界を呪いはじめたころの話だった。

あの時、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグに保護された私は酷く怯えていた。そんな私を見て彼は一言「自分が怖いか？」と言って立ち去っていった。見覚えのある紙束を持って、足音もなく消えていった彼に私は強い畏怖を覚えた。

どうやらガトウや他の紅い翼の人たちとは違い私のことを知っているようで、全く喋らない私に強い興味を持っている彼はよく話しかけてきた。あるときには食べ物や飲み物を持って、あるときには私と同じくらいの年代の子と連れ立って、私に接触してきた。

仮面を着け、黒いローブ纏った彼は、年齢不詳で、性別不明で、本当に人かどうか分からず、声で判断しようにもノイズがかかったように響くそれはとても無機質で人間味を感じさせないものだった。

なぜ彼が紅い翼にいるのか違和感を覚える。まるで彼だけ違う人の描いた絵のように異質で、浮いていた。

でも私は不思議と共感を覚えていた。私のこの力のように人から外れているように思え、次第に言葉を返すようになった。私がこの力を使わないように気を付けて慎重に話せば、自然と口数が少なくなる。

だけれど彼は私の心象を見透かすように、伝えたいことを聞きとってくれた。理解されるという快感はやがて私のどろどろに濁った醜いものをとかしてくれた。

よく彼の近くにいたアスナという子がいる。彼女は私と同じ印象を彼に持っているそうで、話が合うといっても二人とも口数は少ないけれど。

「千草ちゃんの持つ力・・・言霊を制御する練習をしない？」

すっかり此処に馴染んだ私に彼はこう切り出した。その時はちょうどアスナちゃんもいて、二人で積み木をしている最中だった。彼の提案は私にとって青天の霹靂で、とても嫌な気分になった。

「だいじょぶ？」

どうやら表情に出ていたようでアスナちゃんに心配されてしまった。何度もこの力さえなければと思ったことか・・・それをコントロールしないかといった彼を思わず睨んでしまった。

彼のすっかり見慣れてしまったその仮面から鈍く響く失笑が聞こえた。まるでわかっていないとそういつているようで、ますます不機嫌になる私に彼はこういった。

「あの時のようになるよ」と・・・やっぱり彼は知っている私が何をされて何をして、その結果何が起こったかを。

「・・・千草、顔青いけど・・・。」

アスナちゃんに大丈夫だからといい、彼を見やる。黒の中に浮かび上がる白色の仮面、その双眸はぽかりと空いていてこちらを吸い込むような暗黒でした。

彼が本当に私を見ているか分からないがしっかりと頷く、すると彼は満足そうに立ち上がり影から黒板を出した。

「君の言霊という力はとても普遍的で、誰もが持つ曖昧なものだ。たとえば僕が君に暴言を吐いたとする、そしたら君はきつと不快に思うだろう。それは悪意という意味を持っているからだ。」

「文字も同じだ、意味を持つ。でも声に出した悪口の方が堪えるだろう？それは言葉の持つ概念・・・すなわち意味が君の心理状態に影響を及ぼすからだ。そしてこの影響を与える因子が言霊といわれるものなんだ。」

「さてここからが本題だ、我々魔法使いはこの言霊を使って精霊を使役して魔法を引き起こす。しかしだ、この言霊というのはそう簡単に使えるものではなく、だからこそ魔法を使う際に反復をしたり、才能とか言われるんだ。」

「つまり誰もが持つこの言霊という才能が誰よりも優れているのが・・・千草、君ってことさ。」

カゲタロウさんの話は酷く遠まわしでチンプンカンプンでしたが、
どうやら私の力自体は珍しいものではなく稀有なようです。

それから何度も二人で講義を聞き、言霊がどのようなもので、
どのような力を発揮するかを理解していきました。

アスナちゃんは簡単な魔法を習い、私は言霊の制御を学習し、
その様子をカゲタロウさんはつぶさに記録していきました。

この関係は二人が行方不明になるまで続きました。

++++

さて元老院の議員のその秘書的高官になった僕は洗脳した爺さん
のつてを使い、他の元老院メンバーと個人的に食事にいたりして
ます。

現在の僕の姿はナイスバディーなお姉さま風の秘書、銀髪釣り目
がちな美人である僕は魔力は低いもののその頭脳は優れており、お
バかな議員の爺さんどもに重宝されています。

現在地はメガロメセンブリアの高級官邸在住です。ここで爺さん
連中と悪巧みしたり、千草ちゃん教育、魔法の研究を行っています。
す。

「ルル、ルル！」

「はい、僕に何か用ですか？」

「おお、ここに居ったのか。」

どうやら爺さん連中の話によると今の元老院は完全なる世界に抑えられており、マクギル議員は戦争否定派の重鎮で、僕の持ってきたマクギルが成り代わられているという話しは戦争否定派肯定派共に反響があつたそうだ。

とりあえず現段階では動きを取らない方がいいと告げておき、更なる意見交換をする。次に議会が行われたときにこう発言するようだった。

元老院としては戦争を肯定し、赤い翼の支援はしないこと。ただし個人的に支援を送るのであれば、黙認する。

今後赤い翼の支援者が増えたり、彼ら独力で戦況を左右するならば、彼らを祭り上げて英雄として扱い、戦後の元老院の地位向上をする。

完全なる世界に対しては今まで通り。

「むう、それでいいのか？わしらが積極的に動けば……。」

「いえ、僕たちの戦いは戦後から始まります。それまでは誰にも気取られること無く、計画を進めることにしましょう。」

「ルルがそういうのであれば構わんが………軍にはどう通

達する？」

「そうですね。大体は成り行き任せでしょうが、こちらに有利に事を進ませるためにはある程度の方針を決めておきましょう。」

老い先短い爺さん連中では欲が強すぎるので、若い人たちにも計画を担って貰いましょう。壮大な計画の一端を。」

「ルルの言う計画が成功するとは到底思えんがのう・・・。」

「夢は大きく持つものですよ。ではこれより救世計画を始動させます。」

「もし成功したらルルは偉人だの。」

別に成功しなくてもいいんですけどね。

千草ちゃんとカゲの出会い（後書き）

ネギまの変遷

学園ドラマ↓バトルファンタジー↓SFファンタジー？になりそうな予感、どの辺まで魔法を使ってテラフォーミングするんでしょうか？そこらへんが気になるところです。

さて今回出した計画、荒唐無稽なものですが、私がネギまに感じたSFっぽさを私なりに書いていくので楽しみに。

ネギま本編とは少し違う流れにしようと思います。
それではまた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7170v/>

日陰の男

2012年1月7日00時50分発行